

加地伸行著「論語のこころ」講談社学術文庫、講談社 2016年5月18日刊を読む

1. (1)①もし一冊の本を持ってゆくならば——こういうアンケートを求められたことがあった。
②もっとも、それがどういう場合であるのか、ということは問題である。病院での待ち時間のための本、一泊旅行のときの本、通勤電車内で読む本……それぞれ違うことであろう。しかし、共通しているものがある。それは、読み疲れしないような、あるいはどこで中断してもさしつかえないような、いわばその中身が軽いことだ。カントの『純粋理性批判』だの、ヘーゲルの『精神現象学』だのという中身の重い本は、まず絶対に持ってゆかない。
③けれども、もし戦地に赴くとすれば、あるいは絶海の孤島で生活するとすれば、といったような、極限状況の場合ならば、どういう本を持ってゆくことになるであろうか。
 - (2)①残念ながら、姓名は失念してしまったが、過ぐる七十年前の大戦の折、学徒出陣し、戦没したある大学生が文庫本『万葉集』を持っていったと書き記していたのを覚えている。
②読むことが許されるのがたった一冊だけとすれば、選ぶのに悩むこととなるだろう。
③もっとも、信仰を有する者は悩むまい。たとえばキリスト教徒ならば『新約聖書』とすぐ答えを出すことであろう。
 - (3)私の場合ならば、必ず『論語』を選ぶ。大学で中国哲学史を専攻して以来六十年、今日に至るまで、なんらかの形でずっと関わってきたのは『論語』であった。そして、読み返すごとに、儒教の原像が違った形で見えることに驚きを禁じえないのである。
2. (1)①いわゆる世間では、『論語』と言え、道德の権化のように思われている。しかも日本人の道德観、あるいは道德感から言えば、『論語』が説く道德とは、人に対して従順でひたすら耐えるようなもの、人間を抑圧するものといった捉えかたが大半であろう。
②それは大いなる誤解である。『論語』は、人間をありのままに見透し、そうした人間にとっての幸福とは何かという視点に基づいて道德を論じ、そうありたいことを主張している。その内容は、けっして難しいものではないし、実行できるものばかりである。
③ところが、そういう基本的道德(たとえば、親を大切にす、夫婦は仲よくする、友人にはまごころを尽くすなど)を現代人は軽視する。いや、馬鹿にさえしている。とりわけ高学歴の者にそういうことが多い。彼らが説く道德とは、世界平和についてであり、社会福祉についてであり、人権についてであり、環境についてであり……とどまるどころを知らない(抽象的・観念的)道德である。
 - (2)①しかし、身近な人間(両親・配偶者・友人など)に対して愛しきることができない者が、どうして人権や福祉や環境などについて配慮することができるのであろうか。ましてそういう人が平和を語るなど、空理空論でしかない。
②もし戦地に赴くとき、もし絶海の孤島に独り住まざるをえないとき——この比喩を現実に投射するならば、たとえば、老人の独り暮らしがそれに当たるだろう。その日々の孤

独に耐えて生きるとき、何を心の糧とするのであろうか。新聞や雑誌は刺激が強いただけであって心安らかには、なれない。旅行やスポーツも体力的に限界がある。とすれば、最後に残る〈心の平安〉は本となることであろう。

③しかし、本は無限と言っていいほど大量にある。そこからたった一冊を選んで〈心の糧〉とする。これは難問である。しかし、私にとっては難問でない。躊躇することなく、『論語』を選ぶからである。私は本好きの読者諸氏に、たった一冊の本として『論語』をお勧めいたしたい。それは心からの思いである。

3. (1)①本書は、第一章から第十一章まで、各章ごとに解説を置き、そのあとにそれぞれに関わる文を『論語』から選んで並べている。これらは、私なりに体系化して順序を立てているので、最初から読み始められるのがよろしかろうと思う。

②もっとも、心に深い悩みをお持ちの方は、第十一章の「愛と死と孝と」をまず読みたい。そこには、儒教の本質が述べられており、また日本人の心に最も触れる問題について述べているからである。

③あるいは、はじめに最終章「孔子の生涯とその時代と」を読まれて、孔子のおよそのことを理解されてから本文へという行きかたもよろしいかと思う。

(2)①さて、『論語』この二文字の読みかたは、と問うと、すぐさま「ロンゴ」と答えが返ってくることであろう。しかし平安前期あたりから明治初期ごろまで、正式には「リンギョ」と読んでいたのである。なぜか。

②「論」字には、二つの意味がある。①は「討論・議論・論文・論述」といった「とやかく言う、解き明かす、意見を述べる」感じのときは「ロン」と読む。②は「筋道」の感じ。また「倫」と同じで「人間のあるべき道、常」という感じのときは「リン」と読む。

③現代中国語では「論」は「ルン」と読むが、①のときは尻下がりに抑揚をつけて発音し区別する。②のそれは「倫」の中国語の発音・抑揚と同じである。

(3)①そこで、『論語』の「論」を日本では「リン」、中国では尻上がりで「ルン」と読んできた。今も中国人はそう読む。

②一方、平安の昔、同一漢字に漢音と呉音との二種(例えば「経」を漢音では「ケイ」、呉音では「キョウ」)があって混乱していた。そこで菅原道真が仏教書の場合は呉音で、漢籍のときは漢音で読むことを唱え、その方向となった(後にまた混乱する)。「論」字には漢音・呉音の相違がなかったが、「語」字の場合、呉音は「ゴ」、漢音は「ギョ」である。すると『論語』は漢籍であるので、「語」は「ギョ」と読むこととなる。

③そこで『論語』は正統的には「リンギョ」と読み、そう読み継がれてきた。しかし明治中期以降、そうした事実はすっかり忘れ去られてしまっていて今日に至っている。

P3 ~ 6

<コメント>

古典の中の古典とよばれる「論語のこころ」をわかりやすく御説明いただいた加地先生の本書で、「論語(りんぎょ)」に慣れ親しみ充実した人生を送りましょう。

2021年5月29日(土)林明夫